

日本語の二人称小説における人称空間と表現の特性

野村 眞木 夫

1. はじめに

まず、つぎのテキストを観察しよう。

- (1) 光明寺行きのバスがでるまで、十五分以上も待たなければならない、急いでゐるわけではないが、あなたはいらいらしながらバス乗り場をはなれて駅前広場を横切る。右側に西武百貨店、左側にあなたとかれがよくバヴァロアやエクレアを食べたことのある風月堂、そして観光都市らしく土産物を並べた店... ..あなたにとつてはまったく見慣れた鎌倉の駅前だ、しかしいま鎌倉は二月の埃っぽい寒気のなかであなたによそよそしい顔をみせてゐる、まるで、目的のない旅行者、いかがはしい、空虚な眼をした異邦人でも迎へるやうに。

なんのためにあなたは真冬の鎌倉までやつてきたのか... .. 今日は週のまんなかの日だ、十時からB教授の《Variété》があつたのに、あなたは出席しなかつた。あてもなしに東京駅にでた、大丸、丸善とめぐり歩いてまた東京駅へ... .. あなたの選択は二つしかなかつたのだ、中央線の電車で吉祥寺のアパートに帰るか、それとも横須賀線で鎌倉にむかふか。(倉橋由美子『暗い旅』p.7)

- (1)は小説の冒頭であるが、以下のような特徴を見いだすことができる。

第一に小説の登場人物が「あなた」つまり二人称で指し示されている。文末の形態は、基本形を基調としており、しばしば疑問の形式になっている。空間的なダイクシスの中心は「あなた」であり、時間関係のダイクシスの中心も「あなた」の現在に一致している。また、この部分では、明示的に人称化される語り手は特定できない。すなわち、語り手は無人称である。

(1)のテキストにおいて、二人称者「あなた」が主要な登場人物、主人公であるとすれば、その観点からこの種のテキストを「二人称小説」として類型化することができる。

本稿の目的は、日本語で執筆された二人称小説において、テキストや部分テキストの人称空間がどのように構成され、それらに応じて表現の特性がどのように類型化されるのかを、テキスト言語学の観点から整理し、そこから提起される問題点を確認することにある。その目的のために、以下、二人称小説の定義と研究史の展望をおこない、具体的なテキストにそくして表現の特性を整理してゆく。なお、人称空間とは、あるテキストまたは部分テキストにおいて、一定の人称の関係性が認定されるとき、その総体をさすものとする¹⁾。

2. 二人称小説の定義と研究の現況

二人称小説とは、「(主たる)虚構の主人公の指示において呼び掛け代名詞を使用する物語」であるという Fludernik (1996:226) による二人称フィクション (second-person fiction) の大局的な定義を採用しておく。Schofield (1998) もこの定義をほぼ踏襲している。日本語では、地の文において「あなた、君、お前」などによって主人公が指し示される人称空間を基調とするテキスト (小説・物語) がこれに相当することになる。ただし、書簡体小説はここから除外される。

Fludernik (1994c) は、欧米の二人称フィクションのリストとして 129 作品をあげ、次の三つの点からそれら諸作品の性格づけをおこなっている。印欧語のばあい、これらが個々の二人称フィクションを特徴づける共通の観点になる、ということである。

- (2)a. 主人公を指示する二人称代名詞の用法の範囲
- b. 作品におけるテンスとその他の代名詞の用法
- c. 語り手人物や卓立した呼び掛け機能の存否

また、Fludernik (1996:226) は、二人称物語 (second-person narrative) では、語り手の過去の自己が「you-主人公」の経験に関係すること、物語行為の時間と状況に「you-主人公」が生きることになるため、物語行為の語り手と受け手の両者がストーリーレベルで関わりあうようになる、という複雑性を指摘している。この指摘は、Stanzel (1984) 等の物語論を批判しながら展開される、テキストの語りについての議論であり、このタイプのテキストをコミュニケーションのシステムにおいて理解することが求められる。ほかに、小説における二人称として、総称の“you”との関係が問われている (Fludernik 1996:229, Schofield 1998:Ch.3)。

以上は、英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語などで執筆された欧米の二人称小説を考察の対象とした研究の現況であり、それゆえ日本語による二人称小説を理解する方法やそれを特徴づける基準との間にくいちがいの生じる余地が多分にあるが、一定の方向性を示唆するものであろう。

そこで、日本語の二人称小説が研究されている現状であるが、これまでに積極的に取りあげられてきたテキストは、倉橋由美子『暗い旅』と大城立裕『カクテル・パーティー』にとどまる。波多野完治 (1966:186) は、『暗い旅』について、ビュトール『心変わり』への評価をひきながら、つぎのように表現の文体的な効果を指摘する。

- (3) 倉橋由美子氏の「暗い旅」のなかの「あなた」は女性一般ではなく、また「あなた」とよばれたために主人公をおびやかすような調子がでていることもない。そうではなくて、一人称小説にも三人称小説にもみられない、中間的距離をもった、ふわふわと画離された女の心理である。読者は「あなた」に同一化しようとして同一化できず、つきはなそうとしてつきはなせない。一種奇妙な、不安なバランスが、大へん美しく「あなた」から発散する。

これをうけて、根岸正純 (1977) は、同様に文体論の観点から (4) (5) のようにのべる。

(4) 二人称「あなた」を用いる結果として、一種の甘えた饒舌体を印象づけるが、
いうまでもなく話し手と叙述対象との最小距離や親近性の印象をも伴っている。

(5) 「暗い旅」のような「二人称視点」の作品となると、告白や語りかけに不可避免的に伴う自己省察や対象との距離は緩和され、「あなた」に対して見たり感じたりする、なまの生活感覚が、もつと端的に表現されるといつてよいであろう。

さらに根岸は、ダイクシスの観点を導入し、「臨場的な性格、いいかえれば現場性」を認めている。

波多野と根岸の見解に大きな隔たりはないと思われるが、ともに言語表現にそくした緻密な分析によって立論しているのではないため、上記のように判定する基準が明確に規定されていない。

倉橋の作品は、榊敦子(1994, 2004)や菅聡子(2001)によって近年とりあげられている。それぞれ精緻な読み取りが行われているものの、言語分析の観点ではない。

谷本良裕(1992)は、大城立裕『カクテル・パーティー』をあつかうが、「乾いたドキュメンタリータッチの文体」という印象をとりだすにとどまる。

また、鈴木康志(2003)は、人称の変換の観点から仏・独語の小説を分析し、日本語の二人称小説にふれるところがある。

以上、二人称小説が言語表現の研究対象としてとりあげられる現況を素描した。欧米にあっては、物語論においてしばしば言及され、また雑誌 *Style* で特集が組まれるなど、研究成果がみられる。日本語の二人称小説については、作品そのものが少数であることと相まって、その表現の仕組みを言語学の観点からとらえようとした成果は少ない。

3. 日本語の二人称小説とその人称の組み合わせ

まず、本稿で調査の対象とした、日本語の二人称小説と認められるテキストを一覧しよう。次ページの[表1]である²⁾。ここで二人称小説とは、そのテキストの全体、またはあるまとまりをもった部分テキストが、地の文において「あなた、君、お前」などによって主人公が指し示される人称空間を基調とする、という基準によって認めた。

小説の地の文で登場人物が二人称で指し示される例は、この一覧以外にもある。ただし、根岸(1977)のすでに指摘したところであるが、小説において一人称と二人称・三人称の指示が行われ、これが基調になるのであれば、そのようなテキストは一人称小説と認定されることになる。そのようなテキストは、表に記載したものより前にすでに現れており、国木田独步『武蔵野』、有島武郎『小さきものへ』・『生れ出づる悩み』、堀辰雄『風立ちぬ』、安部公房『デンドロカカリヤ』(『表現』版)、倉橋由美子『パルタイ』などがあげられよう。

1961年に二編の二人称小説が発表されたことには、理由が認められる。都筑道夫は、『やぶにらみの時計』三一書房版のあとがきで、二人称の使用は「ミシェル・ビュト

表 1 日本語の二人称小説

刊行年月	著 者	作 品	出版社・掲載誌	人 称
1961.01	都筑道夫	『やぶにらみの時計』	中央公論社	a
1961.10	倉橋由美子	『暗い旅』	東都書房	a
1967.02	大城立裕	「カクテル・パーティー」	『新沖縄文学』4	a,c
1970.04	清岡卓行	「フルートとオーボエ」	『群像』1970年4月号	a,d
1984.11	山口 泉	「聖女県」	『流行通信』1984年11月号	a
1987.02	阿刀田高	「家」	『小説新潮』1987年2月号	a
1990.07	竹本健治	『カケスはカケスの森』	徳間書店	a,b,c
1993.06	辻 仁成	「ゴーストライター」	『グラスウールの城』福武書店	a
1994.07	法月綸太郎	『二の悲劇』	祥伝社	a,b,d
1994.07	山口雅也	「『あなたが目撃者です』」	『小説現代臨時増刊メフィスト』1994年7月号	a
1995.06	菅 浩江	「疎む女」	『サンサーラ』1995年6月号増刊『小説工房』1	a
1997.08	北村 薫	『ターン』	新潮社	a,b,c
2000.04	池澤夏樹	『花を運ぶ妹』	文藝春秋	a,c,d
2000.07 ~ 2002.07	重松 清	「疾走」	『KADOKAWA ミステリ』2000年7月~2002年7月号	a,b
2001.01 ~ 12	多和田葉子	「容疑者の夜行列車」	『ユリイカ』2001年1月~12月号	a,b
2002.01.01	宮部みゆき	「あなた」	朝日新聞（新潮社広告）	a
2003.03	式田ティエン	『沈むさかな』	宝島社	a
2003.12	森 健	「鳥のようにドライ」	『群像』2003年12月号	a
2004.11	大城立裕	「窓」	『群像』2004年11月号	a

ールの『心変わり』になった」と述べ、倉橋由美子は1969年版の『暗い旅』のあとがきで、「Michel Butor の《La Modification》からヒントを得」た旨を明らかにしている。Michel Butor の *La Modification* は、原著が1957年、清水徹の邦訳が1959年に出版されており³⁾、この刊行との関連が著者たちの述べる通りであるとすれば、その影響が創作に反映するまでに、それぞれ若干の時間を要したことになる⁴⁾。

さて、これらのテキストまたはその部分は、本稿の基準によって二人称小説として類型化できるが、具体的な人称の組み合わせは様でない。日本語の人称を、一人称・二人称・三人称とすると、[表1]にあげたテキストの全体または部分テキストに認められる人称の組み合わせの型は、(6)のようになる。

- (6) a. 二人称/三人称
b. 一人称/二人称/三人称
c. 一人称/三人称
d. 三人称

これらの型が、各テキストにどのように使用されているかを、[表1]の最右列に記入してある。しかし、この型は指示関係の範疇によってのみ認定したにとどまる。日本語による二人称小説の表現の仕組みをとりだすためには、さらに多様な観点から

検討することがもとめられる。以下，本稿では，テキストを複数の関係性によるシステムの総体としてとらえ，これを理解する観点を設定しながら，具体的な表現にそくして日本語による二人称小説の特性を整理する。

4．二人称小説における人称空間と表現の特性

4．1 二人称小説をとらえるシステムの設定

本節では，二人称小説に認められる言語表現の関係性によるシステムを仮定し，それらを相互にかさねあわせながら表現を理解することをつうじて，テキストの人称空間の型と表現の特性を整理してゆく。その観点として，(7)の三つを設定し，その具体的なありようを分析的に検討する，という方法を採用する。

(7)a. 人称のシステム

b. 言及のシステム

c. コミュニケーションのシステム

(7a)人称のシステムは，一人称・二人称・三人称の関係性や組合せとしてとらえられる。二人称小説の具体的なテキストにおける，組合せのありようは(6)であり，個々のテキストでのあらわれかたは[表1]の最右列に示したとおりである。この組合せが他の二つのシステムとの関係で，さらに個別の表現性を実現することになる。

このシステムにおいて，日本語には「人称制限」のあることが指摘されている。叙述表現の中核となる述語の種類や文末の形態に応じて提題表現の人称に制限が認められる，という現象である。これについて，仁田義雄(1980： - 3)は，文類型と人称制限・文末構造のあり方の関係を明示している。渡辺実(1991)は，「わがこと・ひとごと」という観点によって，この種の現象を構文論・意味論の問題として把握する。南不二男(2002)は感情形容詞と感覚形容詞にみられる人称制限の現象に関する研究史を整理し，談話の特徴として，談話における伝達の主体のかかわりかたとしての「関与／非関与」と，伝達にかかわる諸要因がその伝達の場に存在するものであるか，言語によって与えられるかという「現場／非現場」との二つをあげている。また，砂川有里子(2003)は，話法の観点から人称制限の現象を自由間接話法・自由直接話法などに関連づける。なお，野村眞木夫(2000)は，人称制限と表現類型のかかわりをテキスト言語学の観点から整理する。このように，人称制限の現象は，構文論から話法，談話・テキストにいたる領域とひろくかかわりをもつことが指摘されている。

日本語について，一人称・二人称・三人称のほかに，文学研究の領域において提案された人称の範疇がある。一つは亀井秀雄(1983:16)による「無人称の語り手」である。これは，作中人物の一人ではなく，また「作中どこにでも(主人公の内面にまで)自由に出入りできる作者自身とは必ずしも一致せず，つまり一応は区別された，その場面における自分の位置をそれなりに自覚している」語り手だとされている。

もう一つは藤井貞和(2001，2003，2004)による提案である。藤井は，亀井の提案を批判しつつ人称をさらに下位区分し，「語り手人称」を「ゼロ人称」，「作者人称」

を「無人称」とし、「主人公たちが、みずからを語り、あるいはみずからの視野で思ったり、見たりする語り」を表現する人称を「四人称」と認定している(藤井 2004:143)。

本稿では、藤井の四人称が日本語において形態的な根拠をもたないことからこれを認めず、また人称の種類を無限定に増加させないために、亀井の定義による「無人称」のみ採用する。これが個々のテキストに出現する様相は、テキストに出現しうる一人称者に近似するものから、語り手としての機能のみをになうものまでが想定される。

(7b)言及のシステムは、本稿では人称のシステム以外に、具体的な表現にそくして規定できる項目を想定している。たとえば、文末表現(ムード、テンスなど)、描写表現・描出表現などの表現類型、メタテキストなどがこれにあたる。

(7c)コミュニケーションのシステムは、野村(2000)でその概要をとりあげたが、想定されるコミュニケーションの参加者の関係、テキストの参加者(登場人物)の関係、コミュニケーションにおける観察者の関係、テキストの内部に想定される観察者の関係などによって規定される。

以上の3つのシステムが複合的に作用することにより、二人称小説に次のような表現の特性ないし傾向が生じることが観察される。

- (8)a. 描出表現を成立させる性質
- b. テキストを記号化する性質
- c. テキストの参加者にはたらきかける性質
- d. 語り手の有する知識量を優位とする性質
- e. メタテキストの表現を選択する性質
- f. 現在時制を優位に選択する性質

要するに、日本語の二人称小説は、(7)のシステムに応じて(8)の性質が多様に発現するテキストとして認定されることになる。次節では、(8)の各性質がどのような表現形式で、またどのような様相で認められるのかをテキストにそくしてとりあげる。

4.2 二人称小説における人称空間と表現の特性

a. 描出表現を成立させる性質

描出表現とは、(9)のような表現類型をさす(野村 2000:251)。

- (9)描出表現とは、「と」などによる明示的な引用の標識が欠けているか、その作用範囲のそとで、コミュニケーションの参加者と区別されるテキストの任意の参加者の発話や思考の内容を対象とし、コミュニケーションの参加者のたちばかりからテキストの参加者をさししめすモードで表現する類型である。

コミュニケーションの参加者とはテキストの送り手と受け手および語り手であり、テキストの参加者とは、小説のばあい、登場人物である。この類型は、印欧語の自由間接話法・体験話法・描出話法などに相当するもので、主に三人称の表現について問題になり、また人称制限との関係が指摘されている。

そこで、まず日本語の人称制限であるが、南(2002)では次のように整理されている。動詞の 希望 の形、感情形容詞、感覚形容詞において、a)それらが一つの文の言い

切りの形の述部にある場合，一人称の主語は可能だが，二人称，三人称の主語は不可能（不自然）であること，b)質問文においては，二人称の主語が可能となること，c)談話（文章）のタイプにもよること，d)体言を修飾する位置にある場合この現象が見られないこと，さらに，e)この現象が認識動詞や感覚動詞にも見られること，である。

(9)は，このうち a)の三人称が可能になる現象として，これまで，とらえられてきている⁵⁾。二人称小説では，a)の制限が二人称に対してゆるめられる。南の指摘する希望の形について制限が解除された例をあげる。

(10) そういう国では，お客さまにそんな迷惑をかけるくらいなら，わたくしメが失業して餓死します，と言って自殺してしまうような可哀相な職員だって出てくるのだ。それに比べれば，誇り高くお客を夜行列車から追い出すフランス鉄道職員は健康で気持ちがいい，ああ，だから，あなたはストライキを応援したい。でも，そうすると，パリの舞台とそのギャラはどうなるのだろう。

（多和田『容疑者の夜行列車』p.11）

(11) しかし，精神は，中学生のあの頃の真っすぐな気持ちに戻っているのだ。君には，君の少し前方を走っているあの頃の少女の後姿が見えている。ブルマーを穿いて，揺れる短い髪の少女。白いスニーカーの裏側が，彼女が土を蹴りあげる度に見える。君は，どうしても追い越したかった。追いついて追い越すことが，君のたった一つの自己顕示であった。（辻『ゴーストライター』p.149）

(10)の下線部は「あなたは……したい。」の形式であり，明示的に言い切りの表現である。この表現類型は，談話の表現としては許容度が低く，南の指摘する人称制限の例にあたる。(11)は「君は……したかった。」となっているが，(10)と同様の制限がみとめられる。ともに(6a)の人称空間での表現であり，(9)の条件にあてはまる。主人公の「あなた」「君」の思考の内容としての希望に，テキストの語り手と受け手，および主人公が，同等の資格で言及する効果を認めることができる。

清水徹は，ビュートル『心変わり』の「あとがき」において，その「細密描写」は「いわば催眠術の手法」であり，「読者は主人公と等質の時間を生き，同じものを見て，同じものを感じてゆき，読者の内的空間には，主人公「きみ」の感じているはずの心理的変貌と同じ変貌の軌跡が描かれてゆく……」と述べているが（p.250f：ルビ等は原文のまま），この解説は希望など思考の表現に端的にかなうと思われる。

三人称小説の描出表現は，(12)が類例となる。

(12) 「書式があるんでしょうけれど，それがはっきりしないんです」

この年の四月から，就学困難な児童のための（教科用図書の給与に対する国の補助に関する法律）が施行された。志野田先生はその補助を，クラスの三人の子供のために申請してやりたい。しかし新しい規定であるだけにその手続きが解らない。教育委員会へ出すのか民生委員に出すのか市役所へ出すのか，まだだれも知らならしい。

（石川達三『人間の壁（上）』新潮社 p.103）

(12)のような表現では，希望の経験者が三人称者「志野田先生」であるため，これが言及する主体は，三人称小説の一般的な人称空間では，テキストの送り手とも受け

手とも形式的な同一指示になりえない。しかし、二人称小説において希望の経験者が(10)(11)のような二人称者であるならば、当該の部分テキストにおいて、「あなた」や「君」はテキストの受け手と形式的に同一指示でありうる。このことの効果として、二人称小説に生じる描出表現は、三人称小説のばあいよりも、テキストの受け手が「あなた」「君」の思考内容に言及する様相が高くなるのである。

b. テキストを記号化する性質

「テキストを記号化する性質」とは、二人称小説では、テキストの参加者、特に主人公に言及する方法において、そこに記号内容としての意味や概念の側面と、記号表現としての側面との二重性を顕在させる認識がしばしば観察されるということである。例によって説明しよう。

- (13) きみは鉄平石の敷石を、大膽にふんで、往来に出てから、門柱をふりかえる。
陶器の表札には 雨宮毅 と楷書で書いてあった。きみはその名前をおぼえこんでから、大型の自動車は一台がやっとの露地を、足のむいたほうへ歩きだす。
(都筑『やぶにらみの時計』p.19)

- (14) あなたにはわからない、この密閉された黄土色の部屋で十字架からおろされたキリストのやうに横たはつてゐる男の考へてゐることが。その男は死人よりも無気味だ、もうあなたにはその男がだれであつたかもわからない... ..
... 佐伯といふ名前をその男がもつてゐるとしても、それは死体の番号札のやうなものだ、あなたにはその名前からなにも説明することができない。この男はただ存在してゐるだけだ、ベッドのうへで、細長い形をして... ..
(倉橋『暗い旅』p.231f)

(13)では主人公「きみ」の、(14)では他の参加者の名前がとりあげられている。(13)のテキストは、主人公が自分を他者から別の人物の名前によって言及されることが主題の一つであり、引用はその別の人物の名前を主人公が認知する部分である。「きみ」はいわば名前を剥奪された主体であり、「きみ」が他の主体に対して関係性を獲得するためには「名前」を取得することが条件として求められているのである。

(14)では、「あなた」と関係をなりたたせる最後の他者として「佐伯」が位置づけられようとする文脈にあらわれている。ここでは、(13)のテキストで求められていた名前が、「番号札」にすぎないものとしてその主体から剥奪される様相をみせる。(13)とともに固有名の記号としての性質を浮き彫りにしている。

- (15) でも、今この瞬間、人込みの中を伏し目がちに歩いているやつは、まだ本当の意味でのきみじゃない。五体は存在するが、それはきみの心とはかけ離れている。細い記憶の糸がかろうじて、かつてきみであったかもしれない存在を、この体のどこか奥の方につなぎ止めているだけ。きみは生きている人間の仲間じゃない。きみは文字通りの死者だ。本当のきみは、この体の中にぽっかり空いた空洞、現世とのリアルな接点を失ったはかない思い出、この街を漂う忘れられた幽霊で、今この瞬間、前を行く人の背中に導かれるように歩いてい

るやつは、きみの抜け殻なのだ。いや、この言い方も正確じゃない。それはむしろ、きみでありうる以前のもの。まだきみではない他人。たとえば、生まれる前の名付けられていない胎児のような垂存在。きみというただひとりの人格が空っぽの内面に移入するまでは、本当に息をしているかどうかとも判然としない書き割りの通行人のひとりにすぎない。だから、ここに記された きみ というがらんどうの代名詞は、かけがえのないきみとまだ本来のきみではないほかの誰かの間で、真っ二つに引き裂かれてしまっている。なぜなら、きみの物語はまだ始まっていないから。

(法月『二の悲劇』p.9)

このテキストでも「きみ」と他の参加者の名前が重要な素材であり、「きみ」がどのように名前をあたえられるかが、以下の展開を方向づけるものとされている。(15)の局面で、「きみ」は言語記号としての名前を獲得しておらず、しかも「きみ」の意味も表現も現実性をみとめられず、言及しがたいものとされている。「きみ」がメディア(もの)としてもテキスト(表現)としても、自己と他者から言及可能であり観察可能であるためには、「物語」に参加することが求められているのである。

このことをより明確にテキストのなかで説明しているのが(16)である。

(16)「いいですよ、何ルピーくれるんです？」

「実はね、ルピーはないんです。」

「え!？」

「その代わり、列車の切符があるんです。でも、普通の切符ではありませんよ。お守りみたいなものです。これを持っていればね、ずっと、鉄道に乗り続けていることができるんです。」

「ずっとって、いつまでですか？」

「この旅が終われば、すぐに次の旅がきます。それが終われば、又すぐに次の旅が来ます。そうやって、ずっと、旅が続いていくんです。」

その日、わたしはあなたに永遠の乗車券を贈り、その代わり、自分を自分と思うふてぶてしさを買って、「わたし」となった。あなたはもう、自らを「わたし」と呼ぶことはなくなり、いつも、「あなた」である。その日以来、あなたは、描かれる対象として、二人称で列車に乗り続けるしかなくなりました。

(多和田『容疑者の夜行列車』p.152f)

(16)は(6b)の人称空間で表現された章の部分である。この(16)で、名前は問われる対象ですらなくなる。「描かれる対象」としての「あなた」は、「わたし」として自己言及し自己観察する機能が失われた主体として位置づけられている。もっともこのことは、表現の仕組みのなかで「あなた」がメディア(もの)として客体化されること、描写される記号表現でしかなくなることの意味しはしない。このテキストの(6a)の人称空間においても、(6b)の人称空間においても、「あなた」は描出表現の主体として記号内容の属性を維持しえている⁶⁾。ただ、テキストの参加者の「わたし」が一人称の「わたし」に優先的に言及するようなスタイルが、「あなた」から失われ、語り手によって言及されるしかない主体として「あなた」の人称が関係づけられている。

さらに、受け手である読者としての「あなた」も、語り手から指し示される主体として、その関係性に参画させられてゆく、ということである。それゆえ、(16)では通念としての可換的な人称の体系が解体しており、自身を二人称とする関係性のみが有効になっているのである。

c. テクストの参加者にはたらきかける性質

二人称で指し示される主体には、コミュニケーションの参加者としての属性が容易に附与される。このために、二人称小説の二人称で指し示される主体は、テキストの参加者、すなわち登場人物でありつつ、想定されるテキストの語り手とのあいだで、コミュニケーションの参加者としての関係性を相互に獲得することができる。

まず、語り手が、二人称者にはたらきかけるコミュニケーションが観察される。

(17) 肥っているおまえは、東京の夏はやりきれないほど暑くて、まるで仕事ができないとこぼすかもしれないが、それでも去年やっとクーラーを買ったじゃないか。それが立てる音を両隣と向いの家に遠慮しながらも、それを深夜までかけっぱなしで、いそいそと何かを書いていたじゃないか。

(清岡『フルートとオーボエ』p.176)

この小説は、全6章のうち5章が(6d)、他の1章が(6a)の人称空間であり、(17)は(6a)の章の部分である。下線部のように「～じゃないか」の文末が観察される。これは、単なる疑問表現ではなく、否定的なまたは非難の意味をともなう確認要求の表現である。このことは、「おまえ」を観察し、「おまえ」に要求し、はたらきかける主体を、テキストの内的なコミュニケーションのシステムに仮定することを意味する。また、この文末形態をもつ文は、テキストの受け手に対する要求としても機能しうる。ただし、その様相には幅を認めることができる。一つの極は、(17)の語り手と「おまえ」が一致しており、語り手が自分自身にはたらきかけているという理解である。他の極は、語り手と「おまえ」を異なる主体とみなす理解である。ここに、テキストの語り手が少なくとも無人称として想定され、また受け手がここに想定されるコミュニケーションに任意の様相で参画することを余儀なくされるシステムを見てとることができる。

このようなコミュニケーションのシステムは、しかし、さらに別のシステムに移行する可能性がある。例えば、(18)のテキストも(6a)の人称空間であるが、語り手と二人称の登場人物のあいだに、明示的なコミュニケーションを成立させている。

(18) つまり？

「あの事故のショックで、こうなったのなら、もう一回事故を起こしてみるのよ」

大胆だね。

「三時過ぎに時間の繋ぎ目がある。だったら、そこでやればいい。失敗しても、風に吹かれて目を覚ますだけのこと」

そう、うまくいけばいいけれどね。確かに、二度あることは三度あったよ。

だけれど、これがずっと続くという保証もない。もし、この世界で苦しんでるまま、時間だけが滑り出したらどうする。

「え」

君は口元を押さえた。

「——つまり、あの階段落ちの状態で、助けが来ないまま、ずっと生きていくってということ？」

そう。

「……想像したくもないわね。それを考えたら、あまり極端なことも出来ないのね。となれば、取り敢えずは消極的に待つだけね。また何かのはずみで時間が繋がるのを」

君は、椅子の背にもたれた。

(北村『ターン』p.106)

この部分テキストでは、「君」の発話が「」でくくられて表現される。地の文は、「君は口元を押さえた」や「君は、椅子の背にもたれた」では「君」の動作を描写するが、これ以外の部分では「君」の発話とのあいだで明らかなコミュニケーションをなりたたせている。つまり、「君」と無人称の語り手は、相互に情報の要求と提供をおこない、相づちの表現も認められる。語り手からは無人称としての制約がなくなり、語り手が何らかの人称を獲得する可能性が生じる。同時に「君」の描写の部分を除くして理解するならば、二人称小説としての属性が極小化する。このようなばあい、(17)で観察したような、テキストの受け手がコミュニケーションに参画する様相が変化し、(6b)または(6c)(6d)の人称空間に近似する可能性が生じるのである。

この(18)のテキストに限定して述べるならば、語り手は「君」の「内なる声」だとされていながら⁷⁾、同時に三人称の登場人物とも融合し、テキストの最後の部分では、語り手と「君」の指し示す人物とが直接に対面するように構成されている。ただし、その最後の部分で、「君」は「わたし」として指し示され、語り手は「あなた」として指し示される。このような人称関係の操作が、このテキストの組織を多様なありようでなりたたせており、コミュニケーションの参加者が相互にはたらきかけるシステムのゆらぎがテキスト全体に導入されることになる。

d. 語り手の有する知識量を優位とする性質

テキストに想定される語り手が、二人称の参加者よりも多くの知識・情報を有していたり、またはより高次の認知をおこなうことによって、二人称の参加者を批判することがある。

(19) やがてランナーの群れは視界から消えて、しばらくすると優勝者のゴールインを号砲が迎えた。

干拓地の上空を舞っていたカラスが、その音に驚いて、急に甲高い声で鳴きだした。

おまえは誰もいなくなった干拓地をぼんやりと見つめる。

気づいてはいなかった。

まだ，知らなかった。

おまえの目は，望みどおり，穴ぼこのように暗くなっていた。

(重松『疾走』p.262f)

(19)では，二人称の参加者「おまえ」が，自分の目に生じた変化を認知していないことが表現されている。このばあい，語り手には参加者に対して認知の優位性とその時間的な優先性があり，「おまえ」に生じた変化にかんする表現の選択が委ねられるものとして位置づけられる。

(20)「話がすごくなってきたね。黒ずくめの殺し屋が，キャセイ航空の旅客機かなんかから，宵闇の羽田空港におりたつわけだな。手持機関銃の入ったコントラバスのケースをさげてさ。ダン・デュリエみたいに，カンカン帽かぶって。」
と，顔をしかめて，猪俣がいう。

「ダン・デュリエか。《飾り窓の女》はよかったですね。あのあと西部劇の悪役しかないんで，残念だけど，殺し屋スタイルじゃあ，あれと《殺られる》のフィリップ・クレイに，とどめをさしますよ。」

と，きみはいう。そんなのんきなことを，いっていられるときではなからうに。どうもきみは，雰囲気巻きこまれやすくて，いけない。

(都筑『やぶにらみの時計』p.157)

(20)では，知識の有無そのものは問われていない。しかし，波線部のように語り手がテキストの参加者に対して批判をおこなうことで，テキストの状況について参加者とのあいだに認識の差異があり，しかも語り手の側に観察者の資格と，評価を下す権利と優位性が確保されていることが理解できる。

(21) ただ，お前はまだ気づいてはいなかったが，娘はなんのためにお前の二十年前の罪をあがなって苦しまなければならないのか。おそらく娘もそのような理屈に気づいてはいまい。彼女にとっては，これからさきどれだけかつづく苦しみの重みだけが問題であって，その理屈などどうでもよいのだ。だが，お前はそれを考えなければならない。ふたつの裁判に娘は敗れるであろう。それまでの娘の苦しみのなかにお前は分けいって，それを考えるべきだ。いま娘が実験をやりなおしやりなおしたしかめているものが何であるのか。それが，娘の苦しみやお前の昔の罪やいまの怒りと，どのような形でかわりあうのか。娘のひとつひとつの動作のなかから，それを探っていかなければならないのだ...

...

(大城『カクテル・パーティー』p.257f)

(21)では「お前はまだ気づいてはいなかった」と，二人称の参加者に対して語り手に認知の優位性とその時間的な優先性のあることが表現されている。さらに，波線部において「～なければならない」「～べきだ」のように，参加者のはたすべき仕事，当為のモダリティによって述べられている。この部分では，語り手がテキストの参加者よりも優位の認知をなし，かつこれにもとづいた批判を経た当為を明らかにするわけである。これは二人称小説でなくとも可能な展開の方法である。しかし，これが二人称の参加者に対するものであるがゆえに，ただ語り手の意見や価値観がテキストに

述べられている，ということではなく，語り手からテキストの参加者にむけてのコミュニケーションとして機能するのである。同時に，このテキストにおいては参加者の「お前」と「娘」の間にも認識の質や量の差異が歴然としている。

以上のように，知識量は語り手が優位に維持されており，それは認知の時間的な優先性にも関連するのであるが，次の例において，「お前」の意識を描出する方法は微妙な問題を内在している。

(22) [パラグラフの前半省略] 医者がうけとって注射器の先を白い天井に向けるのを見て，それがひとつの延命の薬だろうと，妻は思った。お前が窓にすぎるよう^{くずお}にして頼れるのと同様であった。

雨が小止みになった。窓の外の向こうに夕焼けが見える。あの日にあの窓から夕焼けを見て，お前の村でも見えるだろうかと思いをはせた，あの夕焼けだ。それが，この五十九年間をへてまた現れたのか。この自分の肉体があのときは幾つもの危機を凌いできたというのに，いまここでこのように平和のなかで滅びようとしている。にもかかわらず，あの夕焼けがまだ見られるというのか。ただ，お前は知らないが，小川はすでに消えたのだ。妻が見なかったのも無理はなく，小川は戦後の耕地整理ですでに潰されたのだ。そのかわりの灌漑溝がコンクリートで別に造られたことを，お前は知らない。知らないうちに死んでいこうとする。砂糖黍畑も雨もあの日と同じように見られるけれども，それはもはやあの日のものではないのだ。それでもしかし，お前にはあの夕焼けがなつかしく，うれしい。

そのお前の意識を妻は知らずにひたすら思う。せめて気を失う前に，この夕焼けを見てほしかった，と。(大城『窓』p.151)

(22)では，「お前は知らない」とされるその対象が，語り手の知識によって説明されており，語り手における知識の優位性が明らかにされている。しかし(19)(21)とことなり，この例で時間的な優先性は表現されていない。それは，この場面が「お前」の「気を失う」瞬間の表現であることによっていると理解される。「気を失う」ことは，このテキストで「お前」の死を意味している。それゆえ，「お前」にここで知りえていない対象を知る可能性の失われていることが，明示的な批判ではなく含意として表現されているのである。

にもかかわらず，「窓の外の向こうに夕焼けが見える」や「お前にはあの夕焼けがなつかしく，うれしい」は，「お前」の知覚や感情の描出として理解することができる。夕焼けを観察する主体は「お前」に限定されず，語り手を含めた一般的な主体でありうるが，「お前にはあの夕焼けがなつかしく，うれしい」という描出表現が有効であるためには，少なくとも「お前」が夕焼けを認知し，そこから感情を喚起されていることが言語運用上の前提になる。つまり，「お前」と語り手の認知は，描出表現の成立という点においては同等だということである。この部分テキストから，語り手と「お前」の知識の差異は，認知や感情の成立と別のシステムによって表現されていることが明らかになる。さらに，語り手は，妻に対しても知識の優位性を維持してい

るが、このことは全知性ではなく焦点の移動として理解することができる。

e. メタテキストの表現を選択する性質

メタテキストの表現は、テキストがそのテキスト自体に、あるいは他のテキストに注釈的または説明的に言及しているばあいにも認めるものとする。これは、先にあげた(15)の末尾、「きみの物語はまだ始まっていないから」という文がその一例となる。語り手がテキストの参加者である「きみ」に対して、テキストそのものの展開の過程を説明する、というスタイルである。この方式は、同じテキストでくりかえし用いられており、次の(23)は(15)に後続する部分で、名前との関連でテキストに自己言及する例である。名前を割り当てられることによって、「きみ(たち)」は記号としての属性が完備したとみなされ、物語の開始が宣言されるわけである。語り手の優位性にも触れるところがあり、このため語り手による批判が含意される様相がたかめられる。

- (23) こうして、きみの、きみたちの物語が始まる。二宮良明と葛見百合子という名前に寄り添って語られる物語が。だが、それがどういう物語なのか、どんな結末がきみたちを待ち構えているのか、きみはまだ知らない。そして、きみと並んで歩いているかつての同級生の瞳の中に、今この瞬間、微かな不安の翳りが忍び込んでいることにも、きみはまだ気づいていない。

(法月『二の悲劇』p.25)

次の引用も物語の開始を明らかにする言及である。二人称の「おまえ」にその固有名で呼びかける行為がともなう。これは無人称の語り手がテキストの参加者にはたつきかけ、「おまえ」を他者としてみとめるいとなみである。

- (24) おまえは数えることのかなわない雪をまなざしいっぱいに受けながら、少しだけ泣いた。

シュウジ。

おまえの物語は、「にんげん」のために初めて流した、その涙で始まる。

(重松『疾走』p.23)

このテキストは、末尾で断続的に人称空間が(6a)から(6b)に切りかえられている。そこに(25)のようなメタテキストの表現がある。

- (25) シュウジ、おまえの泳いできた海は、もうずいぶん浅くなった。岸が近い。おまえの物語は、もうすぐ長い旅を終える。

わたしは、おまえの物語を語りつづけてきた。おまえを救うためではなく、おまえを幸せに包み込むためでもなく、だからわたしは、ひどく冷たい語り部なのだろう。

(重松『疾走』p.460f)

「海」は、このテキストにおいてストーリーの原点となる景観であり、また「おまえ」の生きてきた世界の比喻にもなっている。二人称の主体に固有名で呼びかけながら、物語の終了を予告するメタテキストである。(25)の「わたし」は、このテキストの(6a)の人称空間で参加者の一人「宮原雄一」として三人称で言及されてきた主体に一致することが理解できるように操作されている。その主体が物語の「語り部」とし

て自己言及する。つまり、(6a)の人称空間では無人称であった語り手が、「宮原雄一」として言及されていた三人称の人物と融合して、(6b)の人称空間において「わたし」に統一されるのである。こうして語り手がテキストに介入し参加する仕組みが構成されている。固有名は、ここでは記号として指し示すはたらきが期待されているのではなく、呼びかけという言葉の基本的な機能を具現するものとして、あるいは他者との関係性を確定するものとして使用されている。

さらに、語り手のみならず作者がテキストに参加するような仕組みが講じられることがある。本稿で取りあげた二人称小説について例示するならば、法月綸太郎『二の悲劇』の主要な参加者の名前が作者と同じ「法月綸太郎」であり、またテキスト中で自作の他のテキストに言及し、物語の一般的な原理にふれる方法が選ばれている。テキスト中で作者に言及する方法は、都筑『やぶにらみの時計』にも見いだされる⁸⁾。

メタテキストの概念を、テキストを語ること、テキストを創作することへの言及として理解するならば、次の引用がその例になろう。

(26) なにを書くのか？ それを考へてもあなたは小説に新しいものを加へはしないだらう、あなたのスタイルの創造は《なに》を超えてゐる、さしあたりあなたがとりあげるのはかれであり、かれの愛であり、かれの愛をとほしてもう一度解読されるあなたの愛だ。

.....ひとが現実と呼んでゐるものはいくつもの側面、いくつもの視点からみられる必要がある、そこで——とあなたは考へる——精緻な小説はひとつの物語を、いくつかの側面から語ることによつて構成されなければならない、一次元ではなく多次元の構造をもつた想像的空間を.....

(倉橋『暗い旅』p.243)

「あなた」が小説を書くことが説明的に取りあげられている。それは「あなた」そのものが解読される対象となること、つまりは「あなた」が小説において自己言及をくりかえすことが前提とされている。ここで受け手が自分を「あなた」と同一視するのであれば、受け手自身が受け手に言及する、というサイクルが立ち現れることになる。(26)の最後の部分が『暗い旅』そのものを評価していると理解するか、あるいは別に想定されるテキストを評価していると理解するかによって、メタテキストとしての表現の仕組みが変化するが、ここでは小説自体のありようとその読み方が明らかにされているのである。

f. 現在時制を優位に選択する性質

二人称小説に、現在時制を優位に選択する性質を認めることができる。このことは、Fludernik (1994a)の指摘するところでもある。この傾向はこれまでに引用してきた例からも、ある程度、了解することができるが、しかしあくまで傾向というにとどまる。ただ、通常の三人称小説で選択されるいわゆる歴史的現在の表現が、一定のスタイル上の効果を期待したものであるとするならば⁹⁾、二人称小説で選択される現在時制は、

むしろテクストの内在するコミュニケーションのシステムによって選択されたスタイルだと考えられる。典型的な例をあげよう。

- (27) 《第一つばめ》はいま海と湖の境を快適なスピードでかけぬける，灰色の水面に影をおとしてゐる黒松………浜名湖らしい，すると浜松はすでに通過してしまつたことになる………もうすぐ豊橋だ，しかし《第一つばめ》は名古屋まで停車しないだらう………あなたは手をうしろにまわして時刻表をとりだす。名古屋着は十三時十二分となつてゐる，たぶんそのころあなたは食堂車でテーブルについてゐるだらう……… (倉橋『暗い旅』p.143f)

このテクストにあつても，語りにおける現在から明らかに切り離された過去の出来事については，(28)のように，むしろ着実に過去の時制が選択されている¹⁰⁾。

- (28) 翌日，あなたは L 女子大学の試験をうけにいつた，その帰りあなたが馬町で電車を待つてゐるとき，生粋の京都人らしい顔だちの中年婦人に話しかけられた，彼女はあなたを自分の家に下宿させたいといつてゐた。あなたは祇園までの電車のなかで早速その話をきめてしまつた。 (倉橋『暗い旅』p.100)

しかし，(27)のようなばあいには，コミュニケーションのシステムがことなる。語り手が，二人称の「あなた」にはたらきかけたり，直接「あなた」と呼びかけることが可能なコミュニケーションの場が想定されている。このコミュニケーションでは，その場において，語り手の現在と二人称の人物にとっての現在が共有されるという関係性が成りたっているのである。(27)においても，テクストは出来事の時間順序にしたがつて展開されている。しかし，語り手の時間と二人称の人物の時間とが，常に同期させられて進行することにより，語り手と人物にとって出来事に言及する時間にズレは生じないわけである。このことによって，(27)は現在時制が選択されているのであって，いわゆる歴史的現在のスタイルを選択するばあいとは，表現の仕組みがことなるのである。

5 . 整理

以上，日本語の二人称小説を認定したうえで，その人称の関係性を人称空間と呼んで類型化し，具体的なテクストにそくして表現の特性を整理した。一人称小説・三人称小説と共通する性質が想定されるが，表現の仕組みを詳細に観察するとそれらとの差異が浮き彫りになる。想定した三つのシステムについて，それぞれどのような特性が観察されるかを主たる項目によってまとめると，つぎのようになる。

- a. 人称のシステム：人称空間，語り手の人称性，人称制限，描出表現への条件，固有名と指示詞の使用
- b. 言及のシステム：人称とモダリティの関係，時制の現れかた，描出表現において言及される対象，固有名と指示詞による言及，テクストへの言及，知識量・認知の差異による批評・批判，メタテクストにおける批評・批判

- c. コミュニケーションのシステム：語り手による観察とはたらきかけ，語り手と二人称の人物のコミュニケーション，知識量の差異，認知の差異，認知の時間的な差異，テンスを選択しまたは制約する条件

対象とすべきテキストそのものが少なく，それゆえに提起される問題点も部分的な指摘にとどまらざるをえない。しかし，テキストの表現の仕組みを人称との関連で理解しようとするとき，ひとつの観点をあたえる対象として二人称小説を位置づけうる事が明かである。テキスト言語学の観点から人称を体系的に整理することが今後の課題となる。

注

- 1) 木村大治(2003:88)。
2) 本稿において[表1]に記載したものと異なる版を使用した作品は，次のとおりである。

『やぶにらみの時計』：『女を逃がすな』光文社文庫
『カクテル・パーティー』：『カクテル・パーティー』文藝春秋
『フルートとオーボエ』：『アカシヤの大連』講談社文庫
『家』：『恐怖同盟』新潮社
『ゴーストライター』：『グラスウールの城』新潮文庫
『二の悲劇』：『二の悲劇』詳伝社文庫
『『あなたが目撃者です』』：『ミステリーズ 完全版』講談社文庫
『ターン』：『ターン』新潮文庫
『疾走』：『疾走』角川書店
『容疑者の夜行列車』：『容疑者の夜行列車』青土社

- 3) Michel Butor *La Modification* (1957) は Les Éditions de Minuit 2003 年版により，訳書は清水徹訳『心変わり』河出書房新社(1959)によった。
4) ビュートルについては，法月『二の悲劇』新書版後書きでも言及されている。
5) 詳細は，保坂宗重・鈴木康志(1993)，野村(2000:第5章)を参照されたい。
6) 人称空間(6a)における描出表現の例は(10)である。(16)と同じ章の人称空間(6b)における描出表現には，次のような例がある。

「そんなものは，ぶち壊してしまいなさい。」

シヴァにそう言われても，列を壊すなどということは，あなたにはできない。
そこで，こそこそと前の方に行って，もぐりこんでみた。それだけでも。あなたは後ろめたかった。(多和田『容疑者の夜行列車』p.147)

- 7) 語り手が「内なる声」だとされるのは，次の引用などによる。ただし，このことが取りあげられるのは，(6c)の人称空間においてである。したがって，次の引用の「わたし」は(18)における「君」である。

ひょっとしたら，生まれる前から...そう思った。

自分の内にそういう人の姿を抱くのは、珍しいことでもないだろう。当たり前かも知れない。しかし、その人が自分と共に成長し、声をかけてくれる……となったら、また話は別だ。

わたしが、いつから、内なる声と会話を始めたのか分からない。

(北村『ターン』p.284)

- 8) 本文での引用は措き、使用した版での該当箇所を指示するにとどめる。
法月『二の悲劇』『法月綸太郎』は随所、自作への言及は p.214, p.373。
都筑『やぶにらみの時計』p.136。
- 9) 工藤真由美(1995:188)は、はなしあいのテクストにおいて「客観的には過去のことではあっても、心理的には現在のことであって、過去の出来事の記憶の生々しさ＝発話時における心理的現在を表現しているのである」とする。この効果は、他の種類のテクストにも敷衍できる。
- 10) 語りにおける現在は 1961 年 2 月、(28)は 1955 年 3 月と算定できる。

参考文献

- 東 弘子 1992 「感情形容詞述語文における感情主の人称制限」『日本語論究 3』和泉書院
- Bal, M. 1997 *Narratology: Introduction to the theory of narrative*. (2nd ed.) Univ. of Toronto Press.
- Fludernik, M. 1993 "Second Person Fiction: Narrative *You* as Addressee and/or Protagonist." *AAA-Arbeiten aus Anglistik und Amerikanistik*. 18 .
- Fludernik, M. 1994a "Introduction : Second-Person Narrative and Related Issues." *Style*. Vol. 28 -3.
- Fludernik, M. 1994b "Second-Person Narrative as a Test Case for Narratology: The Limits of Realism. " *Style*. Vol. 28 -3.
- Fludernik, M. 1994c "Second-Person Narrative : a Bibliography." *Style*. Vol. 28 -4.
- Fludernik, M. 1996 *Towards a 'Natural' Narratology*. Routledge.
- 藤井貞和 2001 『平安物語叙述論』東京大学出版会
- 藤井貞和 2003 「ゼロ人称と助動詞生成 - 物語/和歌の文法的動態」『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』10-1
- 藤井貞和 2004 『物語理論講義』東京大学出版会
- 波多野完治 1966 『文章診断学』至文堂
- 保坂宗重・鈴木康志 1993 『体験話法(自由間接話法)文献一覧 - わが国における体験話法研究 - 』茨城大学教養部
- 磯貝英夫 1971 「『暗い旅』」『国文学 解釈と鑑賞』36-9
- 亀井秀雄 1983 『感性の変革』講談社
- 菅 聡子 2001 「女流作家 L の微笑 - 倉橋由美子初期作品をめぐって」『淵叢』10
- 木村大治 2003 『共在感覚 - アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都大学学術出版会
- 金水 敏 1989 「「報告」についての覚書」仁田・益岡編『日本語のモダリティ』くろ

しお出版

- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト - 現代日本語の時間の表現 - 』
ひつじ書房
- 南不二男 2002 「談話の性格と人称制限」『近代語研究 11』武蔵野書院
- 南不二男 2003 「文章・談話の全体構造」『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店
- 中川 裕 1995 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
- 根岸正純 1977 「小説における二人称の視点」『獅子吼』61-7
- 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野家啓一 2003 「物語り行為による世界制作」『思想』954
- 野村眞木夫 2000 『日本語のテキスト - 関係・効果・様相 - 』ひつじ書房
- 野村眞木夫 2004 「「夕焼け」のポイエーシス - テキストとしての現代詩 - 」『表現研究』80
- Prince, G. 1987 *A Dictionary of Narratology*. Univ. of Nebraska Press.
- 榊 敦子 1994 「「わたし」と「かれ」のあいだ - 倉橋由美子にみる「他者」概念との戯れ - 」鶴田欣也編『日本文学における「他者」』新曜社
- 榊 敦子 2004 「倉橋由美子」『女性作家《現在》』（[国文学 解釈と鑑賞]別冊）至文堂
- Schofield, D. 1998 "The Second Person: A Point of View? The Function of the Second-Person Pronoun in Narrative Prose Fiction." DEAKIN UNIVERSITY. (<http://members.westnet.com.au/emmas/2p/index.htm>)
- Stanzel, F. 1984 *A Theory of Narrative* (Second revised edition). (tr. by Goedsche, Ch.) Cambridge Univ. Press.
- 砂川有里子 2003 「話法における主観表現」『朝倉日本語講座 5 文法』朝倉書店
- 鈴木康志 2003 「思考・発言再現における人称の変換() - 3人称小説・1人称小説・2人称小説の場合 - 」『文学論叢』127
- 谷本良裕 1992 「二人称小説という存在について」『徳島大学国語国文学』5
- 渡辺 実 1991 「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」『国語学』165
- Yamaguchi, H. 1989 "On 'Unspeakable sentences': A pragmatic review." *Journal of Pragmatics*. vol.13-4.

付記：本稿は，2004年10月21日に行われた日本教育大学協会北陸地区会平成16年度国語科書道科合同研究協議会における口頭発表をもとにしている。ご意見をたまわったかたがたにお礼申し上げます。

（上越教育大学 / 日本語学）

『上越教育大学 国語研究』第19号（2005年2月）